

原発事故と学生運動

原発事故後、多くの外国人は放射能被爆の不安から直ぐに国外に退去した。

諸外国であればこうした時は暴動、混乱が起こるのに日本ではそうしたことが起こらなかったことが、諸外国からは驚きの目で見られている報道をしばしば目にする。

原発事故は安全神話を掲げた国策による人災だけに、怒りが国民大衆運動に至らないのはなぜなのだろうか。

ふと、60年安保の時代、国策に「否」を掲げて国会周辺を何重にも取り巻いたあれだけの大衆運動まで拡がり、その先頭に立ったのは当時の大学生たちであったことを思い出した。

学生たちは社会の矛盾からあるべき姿を敏感に感じ取り、国民に社会のあり方を問題提示していく熱い思いからの行動をする存在だったと思う。

残念ながら、今回の原発事故後、学生たちが原発に関連して社会のあり方を提示する学生運動の報道には接していない。

脱原発、代替エネルギーまでの継続、原発依存、いずれにせよ若者たち自身の担うべき次世代のエネルギー問題なのに、どうして大学生たちは先頭を切って声をあげないのだろうか、不思議に思っていた。

そうした折新聞書評欄で、60年安保の学生運動を知らない61年生まれのノンフィクションライターが、当時の学生運動の関係者に取材した「全学連と全共闘」の出版を知り、当時の学生たちの思い、行動が見えるかなと購読した。

「呪文のような左翼用語」を避けて書いたというだけに読みやすく戦後の学生運動の「希望が潰えていく」過程は何となく知ることができたが、今一、当時の学生たちの純粋な思いはこの本から自分には伝わってこなかった。

福島原発事故後、時を置かずにインターネットを通じてのドイツ、イタリアの脱原発へ国民大衆の意思表示行動による国策の方向転換、チュニジア、エジプト等のインターネットを通じての国民大衆の意思表示行動による政権交代、等々から分かるように、社会への発信様式が主にインターネットになったように社会の質が変わってきた時代故に、学生運動はその存在意義が乏しくなってきたと云えるのかも知れない。